

# 平成 26 年度学校評価書

学校名	兵庫教育大学附属小学校
-----	-------------

## 1 学校教育目標

人間として生きぬく力を育てる

- ・ねばり強く問いつづけ、よりよいものを創り出す子
- ・はげまし、支え合い、共に伸びる子
- ・強い心とたくましい体をつくる子

## 2 自己評価結果（達成状況）【A：達成している B：概ね達成している C：あまり達成していない D：達成していない】

分野・領域	評価項目（取組内容）	取組達成の状況	評価	改善の方策
教育活動	確かな学力を形成するための取組 ・教育課程の改善や学習指導方法の工夫などにより確かな学力の形成をはかる。	「『子ども—文化—教師』をつなぐ」（2年次）のテーマのもと、年間を通して、前期授業研究会、後期授業研究会、そして研究発表会と、教師は力量を高めながら児童の学力形成に尽力した。さらに昨年度から取組みはじめた、CRT検査による学力の全体的な傾向を把握し、基礎的基本的な学力の充実に向けての取組みを始めている。全国学力学習状況調査の結果においても、CRT検査においても学力の2極化がやや見られる傾向にある。	B	それぞれの学年で押さえるべきことが定着できるよう、補充プリント、補充学習途等の機会をふやしていく。
	豊かな心を育むための取組 ・全校縦割りの集団活動や道徳教育などを通して豊かな心を育むことをめざす。	行事や異学年交流を通して、豊かな心を育む取組みを進めてきた。その中で、多様な個性を持った子どもたちへ対応するために、特別支援教育関係の研修会を実施するなど、子ども理解への取組みを強化しているところである。さらに今年度は、生徒指導部会等を通じて学年を超えた子どもの実態把握に努めている。	B	落ち着いた学習環境を創り出すために学習規律の徹底やどの子にも優しい授業づくりなど、多様な構成を持った子どもたちへの対応できるスキルアップを図る研修の機会を増やす。
	健康な体を培うための取組 ・様々な体験的な活動などを通して健康な体を培うことをめざす。	体育においては、運動文化の視点から児童の実態にあった教材づくりを行い、実践することで健康な体作りを目指した。林間、臨海、耐寒訓練マラソン大会等で体力と共に強い意志力を育んだ。食生活と家庭での生活習慣を適正に保つために、家庭科や理科の授業と連携したり、保護者に対して、保健日より、給食日よりによる啓発活動を推進したりした。	B	基本的な生活習慣の確立のため、「早寝・早起き・朝ご飯」等、家庭への啓発活動を充実する。
学校運営	組織運営 ・附属学校長がリーダーシップを発揮し、大学・学部と一体となった学校運営を行う。	校長・副校長・教務主任が常に全体を見据えた経営を心掛け、全職員共通理解のもと教育活動を展開することができた。今年度の重点的取組みとしては、会議等で事前に文書を配布し、あらかじめ目を通しておくように指示したり、開始時刻の厳守を呼びかけたりしながら、効率化を図りながら、職場の労働環境の改善を行った。	A	会議時間等の数値化により、時間を意識することにより、効率的な業務運営改善を図る。
	教育実習 ・大学の計画に基づき、実習生の資質・能力を高められるような実地教育を行う。	教育大学附属小学校としての教員養成の責務を教員に繰り返し説くと共に、大学からの附属学校園への評価や、教員就職率全国一位を報道する新聞記事を配布する等して教員の意欲を喚起しながら実地教育の充実を図った。	A	
	大学・附属中学校・附属幼稚園との連携・協力 ・附属学校運営会議のマネジメントのもと、大学・学部と一体となった附属学校園の連携を進める。	従前の附属学校園連携委員会・連携推進協議会に加え、研究発表会参加を教員に呼びかけて、交流の深化に努めた。附属中学校との社会科プロジェクトを継続したり、幼稚園での行事に小学校教員が友好出演したりするなどして連携を深めた。	B	附属学校園で一貫した子ども観をもとにした教育方針を確立していく必要がある。
	保護者との連携協力 ・学校教育目標の達成をめざし、保護者と学校の連携を進める。	年々、PTAの協力体制のノウハウや引き継ぎが確かなものになってきており、創意工夫のある活動を推進している。ボランティアの父親で構成される「おやじの会」も児童、保護者、教員の関係づくりのために、様々なイベントの企画、校内環境の充実に積極的に尽力してく。保護者の価値観の多様化により、子ども間のトラブルや学校への要求等対応に苦慮する場面が多くなってきている現状があり、職員間での情報の共有・共通理解に基づいた行動等教職員の意識化を図っている。	B	教員のPTA活動やおやじの会活動への積極的な参加をすすめる中で、日頃からのコミュニケーションの深化を図る。保護者の意識・ニーズの把握に努めると共に、教職員間での共通理解を図る。

## 3 分野・領域ごとの学校関係者評価

学校自己評価結果及び改善の方策の適切さについての評価
<p>○厳しめに自己評価しているようにも感じるが、保護者としては一番関心のあるところであり、学力面での取組みをより一層工夫して行ってほしい。</p> <p>○生活習慣についてはPTAとも協力し、継続して取り組んで行ってほしい。</p>
<p>○夜近くを通るとこんな時間まで電気がついているのとびっくりしたことがある。先生方が健康であってこそ、良い教育ができると思うので、先生方の健康管理面も含め、業務改善の取組みを進めて行ってほしい。</p> <p>○研究会、行事等をもて学校と保護者との連携がうまくできている。保護者が子どもとの行事を企画したときなどでも、教員の協力を得やすい。これらの点は大きく評価することができる。</p> <p>○幼・小・中の連携についてはせっかく近くにあるのだから、一貫した取組み等工夫の余地はいっぱいある。十二年間の連続性を考えて工夫して行ってほしい。</p>

分野・領域	評価項目（取組内容）	取組達成の状況	評価	改善の方策
研究活動	<b>大学との研究協力</b> ・大学教員と附属学校教員が研究テーマを共有し、大学・学部内の人的・物的資源の効率的活用を図る。	各教科等において共同研究を積極的に進めている。研究発表会では、助言者として10名の大学教員に指導を請うことができた。大学からの研究要請を受け自己効力感の発達に関するアンケートを行った。 インクルーシブ教育システム構築モデルスクール事業では、大学の専門家をアドバイザーとして継続的に招聘し指導を受けた。	A	
	<b>大学との連携体制</b> ・大学・学部の教員が研究実践の一環として附属学校で授業を担当する。また、附属学校教員が大学・学部の授業を担当する。	大学授業(リフレクション及び学部授業)を附属学校教員が担当した(国語3名、社会科2名、音1名、図工2名、初等生活1名、体育1名、英語1名)。 研究面だけでなく、日々おこる諸問題をについても大学との共通理解を図る場を持つようにした。	B	本校にとって教育委員会にあたるものが大学であり、学校運営全般について、共通理解を図ることが必要である。
	<b>全国規模の研究協議会の開催等による地域を越えた普及・啓発</b> ・附属学校の研究成果について、地域を越えた全国規模の普及・啓発を図る。	研究発表会は、本年度、金曜日1日のみの開催で行った。県外からの参観者が多く、県内からの参加者があまり伸びなかった。当日は、授業参観、研究協議や出版物を通して、本校の研究成果を広めることができた。午後には、教科別分科会に加え、熊本大学教育学部苦野一徳先生を迎え講演会を行った。 そのほか、地域への本校教育の還元活動として、附小交流会を実施している。今年度は、昨年度より1領域増え、国語、社会、算数他全7教科・1領域(英語活動)で授業公開、研究協議会、実技研修、情報交換会を実施し、地域の学校の研究活動に貢献している。	A	現場のニーズと悩みを把握し、本校の研究の中で現場へ発信する取り組みをすすめる。
	<b>研究開発学校制度等への応募</b> ・文部科学省等による研究開発指定などを積極的に活用するために、今年度についても積極的な応募を行う。	インクルーシブ教育システム構築モデルスクール事業では、附属幼稚園・中学校と連絡会を持ち情報交換を行ったことには、大きな意義があった。	A	
安全管理等	<b>防災教育</b> ・実践的な態度や能力を育てる防災教育の推進を行う。	担当教員を中心に計画的に防災訓練を実施し、児童の実践的防災能力を高めた。 1学期：幼稚園との合同訓練による不審者対応、2学期：火災、3学期：地震	A	
	<b>健康・安全教育</b> ・生命を尊重する健康教育と安全教育の推進を行う。	健康・安全については、栄養教諭、養護教諭を中心に担任の協力を得ながら、それぞれの立場から継続的に指導を行っている。今年度は、特に「いじめ」については、対応組織を立ち上げると共に、アンケートを採ったり、各学級でケースに応じて指導したりしながら、児童が安心して学校生活をおくれる環境作りに努力した。	A	
	<b>施設設備</b> ・児童の学校生活の場にふさわしい施設設備を整える。	遊具及び教室の施設・備品について、定期的に安全点検を行い、適宜補習や危険回避措置を講じた。改修計画を立て具体的な整備を推進している。	A	
	<b>安全管理</b> ・児童にとって安全・安心な環境を整える。	公共の乗り物の使用マナーについては、年々改善が見られているが表面化しない苦情も少なくない。定期的に、バス停、駅まで教員が同行しながら、指導を継続した。校内で廊下を走っている児童について全校的な指導を行い、安全面への意識化を図った。気象警報発令時の安全な下校のためにメールなどを活用する仕組みを整えた。	B	校内で施錠が必要な場所については施錠を徹底する。委員会等に活動の中で学校での安全な過ごし方等を発信する。

学校自己評価結果及び改善の方策の適切さについての評価
<p>○本年度の研究会もたくさんの参加者があり、附属の取り組みを発信できたのではないかと感じる。</p> <p>○保護者にも子どもを通して研究の成果がより実感できるようになればという思いもある。</p>
<p>○子どもたちの登下校のマナー、保護者の行事等で保護者が使用する駐車場のマナー等、今後ともマナー向上をはかっていく必要がある</p>